

語り部を通じた災害の疑似体験に関する考察 —地域防災シンポジウムの参加者アンケートより—

村 上 真 理*

木 村 寛 大**

要 旨

本研究では、自然災害の「語り部」から被災体験の伝承を受けた「聞き手」が、災害を疑似体験することにより、以降の防災対応への意識を高めるという心理的メカニズムについて検討した。具体的には、まず先行研究のレビューを通じて語り部の機能や効果、本質等について整理し、次いで地域防災シンポジウムの参加者を対象にアンケート調査を行った。これを探索的に分析したところ、「関係に関する認識や理解」「関係に対する肯定的な態度」といった心理的側面と整合する結果を得たものである。

キーワード：語り部、疑似体験、リレーションシップ・マーケティング、相互作用、コミットメント

1 はじめに

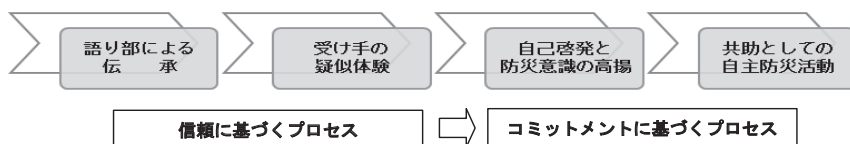
近年、わが国では自然災害の被災者らによる「語り部」活動が活発化している。それに伴う研究も様々に行われているが、その多くは語りによる想起や伝承、受け手とのギャップについてなど社会学・心理学の領域からのアプローチ

* むらかみしんり、九州国際大学現代ビジネス学部・地域防災リーダー育成プロジェクト顧問、murakami@cb.kiu.ac.jp

** きむらかんた、九州国際大学国際関係学部・地域防災リーダー育成プロジェクト学生サブリーダー、r16059@isbs.kiu.ac.jp

である。情報を伝えられて以降の受け手の行動に関する研究は限られており、語り部に影響された個人が、どのような防災行動をとるかは十分に明らかでない。また、大規模な地震や豪雨土砂災害が頻発している現状を勘案すれば、広域での協力的な防災対応は不可欠である。しかし、個人レベルでの意識の高まりが、それらに結びつくプロセスについても判然としない。加えて、行政による防災施策が防災学や都市工学、リスク管理論等を中心としたものであり、個人からボトムアップする形での防災対応との接点を見出しにくい面もある。

このような中、筆者らは九州国際大学地域防災リーダー育成プロジェクト¹での活動を通じて、被災体験の「語り部」がどのような影響力を持ち、聞き手による防災活動へいかに繋がっていくかのメカニズム解明に取り組んでいる²。具体的には、プロセスを4つの局面に分け（図1）、これらへ領域横断的にマーケティング理論の横串を通すことで、これまでほとんど議論されることのなかった変転作用の見える化を図るものである。研究としては緒に付いたばかりだが、先般、学内で地域防災のためのシンポジウムを開催する機会を得、東日本大震災の著名な語り部を招いた。本稿は、シンポジウムの参加者を対象に実施したアンケート調査の分析と考察をまとめたものである。



出所：筆者作成

図1 疑似体験から自主防災活動にいたる4段階

2 語り部研究の諸相

2.1 語り部の定義

語り部とは、古代において「古伝承」を儀式の際に語ることを職掌とした部民のことである。現代ではこれが転じて、自ら体験・伝聞したことを後世に語り継ぐ人という意味で用いられることが多い³。例えば「沖縄戦の語り部」は、太平洋戦争末期における悲惨な体験を次世代へ継承することを目的としている。広島や長崎の被爆体験に基づく語り部運動もよく知られているが、中でも広島市は平成24年から「被爆者体験伝承者養成事業」を展開している。これは高齢化の進む被爆者から平和への思いを受け継ぎ、それを次世代へと伝える被爆体験伝承者を養成するためのものである⁴。

一方、近年は自然災害の被災者らによる語り部活動が盛んに行われている。それに伴う研究も阪神・淡路大震災を機に本格化し、これまで数多くのアプローチがなされてきた。戦時体験の語り部も自然災害の語り部も、語りの本質に大きな差異はないと思われる。しかし前述したように、本研究は、語り部による伝承がいかに関与者の防災行動に繋がるかを明らかにすることを最終的な目的としている。したがって、ここで参照する先行研究は自然災害に関するもののみとし、語り部についても「自然災害に伴う自らの体験や伝聞を他者へ語り伝えること」と定義する。

2.2 協働想起の視点⁵

自然災害に関する語り部の研究では、阪神・淡路大震災の伝承に関する研究が注目される。高野・渥美(2007)は、グループ・ダイナミックスの見地で集団間の伝承の実態を考察するため、阪神・淡路大震災記念『人と防災未来センター』という現場に内在し、語りによる震災の協働想起の場面を検討した。ここでの語りの内容のうち、自分や自分の周囲の人の被災体験話は、①防災に関する具体的な知恵を主張するもの、②命の大切さや助け合いの大切さを主張す

るもの、に大別される。聞き手の反応では、前者については具体的な防災の知恵をなぞって覚えようとする様子が見られ、後者については、語り部の話を受け止める際に戸惑いや懐疑が見られたという。

さらに高野らはワーチ（2002）の研究を参照し、被災体験を伝える際、聞き手は防災の知識を「習得」する場合と、命の大切さを「占有」する場合とがあると指摘する。そして、この聞き手が次の世代に伝える際、語り部側との規範のせめぎ合いを経験しながら命の大切さを「占有」した人は、その戸惑いが大きい分、次の人に語りたくなるのではないかと述べている。その逆に、防災の知識を習得した人は、それを抵抗なく受け入れた分、占有した人に比べ次へと語る行動に出にくいという。

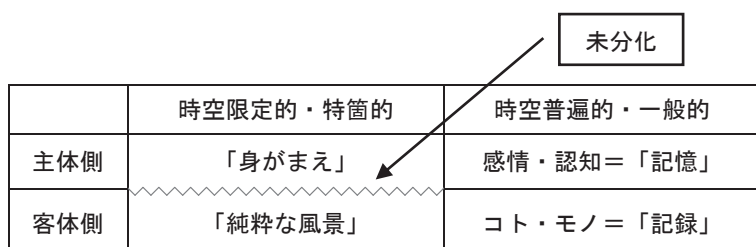
渥美（2003）もグループ・ダイナミックスの視点から、震災の記憶の伝承は諸個人の身体内面のやりとりではなく、震災を協働で想起（remember）し続ける行為であると述べている。ここでいうグループ・ダイナミックスは、伝統的な「内面－外界」の図式と決別し、社会構成主義（social construction）に依拠したものである。そこでの記憶は単なる貯蔵された情報（memory）ではなく、想起（remember）として織りなされる集合的な活動の総体であり、震災の記憶の伝承も、協働的实践を通じて想起が生じ人々の行動を変革するに至って初めて意味をなすという。

2.3 記憶と伝達

矢守（2002a）は、阪神・淡路大震災の後に建設された博物館『北淡町震災記念公園（野島断層保存館）』が果たす心理的社会的機能について検討した。同館の事業には、異なる2つの伝達の方法が存在するが、双方とも固有の有効性を持つことから、これらベクトルをいかに補完的に統合するかが重要であるという。留意すべきは、ここで用いられた記憶と伝承に関する考察のフレーム・ワークである（図2）。矢守は突発的で激甚な自然災害の体験を「時空限定的・特簡的」なものと位置づけるが、そのような体験には、出来事としての「かけ

がえのなさ」が残留する傾向が強い。それは、さらに記録と記憶の双方の生成（つまり時空の普遍化・一般化）を拒む。このような状況にある体験者を主体として物象化したのが「身構え」であり、その主体が捉える客体が「純粋な風景」である。なお、普遍化・一般化に至る以前の原初の様相を呈している出来事が、図内の左側「時空限定的・特箇的」な物象に配置される。ここでは「身構え」と「純粋な風景」とは明確に分化していない。

さらに矢守(2002b)は、同じフレーム・ワークを用いて『劇団青い森』の震災を題材とした舞台作品を考察した。そして、ここでは観客がそこに期待するような普遍的メッセージが最初から想定されていないとの結果を得ている。その理由は、この作品が震災体験を普遍化すること（すなわち「記憶／記録」化すること）を避け、その原初の様相（すなわち「身構え／純粋な風景」による世界）を再生する構成になっているからである。これは伝達する者（演じる者）と伝達される者（観客）の双方を主体的に関与させることを志向したものに他ならない。



出所：矢守克也（2002a, p60）

図2 考察のためのフレームワーク

2.4 語りの本質

本研究では、地域防災シンポジウムの基調講演における講演者を語り部として捉え、その影響について検討を加える。したがって、その語りがどのような性質のものであるかについても考証しておかねばならない。この点、矢守（2003）の阪神・淡路大震災の語り部活動に関する研究は興味深いものである。ここでは語りの内容よりもその様式に注目し、かつ語りを巡る集合性の動態に焦点が当てられている。そして個々の語りの様式を規定する存在として「バイ・プレイヤー」という分析概念が用いられた。

その結果、複数の語り手は、同じ震災体験を語っているにもかかわらず、その様式がまったく異なっていることが明らかになった。語りに登場する特定の人物がバイ・プレイヤーの役割を果たし、語り手本人とバイ・プレイヤーとの間で生じる「視点の互換」が語りの基本構造を規定するからである。さらに、バイ・プレイヤーのあり方に現れた語りの様式の違いから、各人のライフストーリーのみならず、聞き手や語りの対象となる人物等を含めた集合性の動態分析にも一定の可能性のあることが示唆された。

3 リレーションシップ・マーケティングの援用

前節で見たように、語り部は、語り手から受け手への語りの連鎖、グループ・ダイナミックスの視点による協働想起、さらには語りの本質である「時空限定的・特箇的」な物象、主体における身構えとしての記憶などの面から捉えられる。これらに共通するのは、語り手と受け手との相互作用（必ずしもこの表現が用いられているわけではないが）を前提としている点である。続く本節では、地域防災シンポジウムという場における語り手から参加者への作用について、リレーションシップ・マーケティングの視点から考えたい。

邦訳で「関係性マーケティング」と呼ばれるリレーションシップ・マーケティングは、一般に、顧客との間に友好的で持続的かつ安定的な関係を構築し

ようにするものと理解される。なお、関係ではなく相互作用という表現も同じ意味合いで多用されている。この関係には、物事の類似性としての関わりと、結合としての関わりの2つの意味が含まれ、さらに後者は「結合の内容」と「結合の構造」に分化される。このような整理のもと、相互作用のあり方を分析視点とするのが相互作用アプローチである(久保田, 2012)。

相互作用アプローチでは、対象となる物事の相互作用に着目する。そして、そこでのやり取りの実態や、結果・成果、やり取りに影響を及ぼす要因や環境が検討される。ここでの要点は、分析対象同士は何らかの形で結びついているという仮定と、分析対象はそれぞれ異なる属性を持つと考え、その違いに着目することである。先行研究では関係を相互作用として捉えたものが少なくないが、例えば、Håkansson and Snehota (1995) も、リレーションシップとは相互作用プロセスの結果であり、そこで当事者らの間に結合が生じることで、相互に志向しあう傾向とコミットメントとが創出されると述べている。

ここでいうコミットメントは「ある相手との間に結びつきを感じていて、その結びつきを重要なものと信じていること」である(久保田, 2012, p27)。相互作用としてのリレーションシップは様々な要素から捉え得るものだが、各要素は互いに独立しているのではなく連動性をもって作用する。それらを結び付ける役割を持つのがコミットメントであり、心理的変数の1つと考えられる。そして久保田(2012)は、その心理的側面は売り手・買い手とも、①関係に関する認識や理解、②関係に対する肯定的な態度、③関係的な行為を遂行する態度、から分析できるとしている。

以上のように、当事者間の相互作用は、マーケティング論においてはリレーションシップ・マーケティングの領域に属するテーマである。ここでは相互作用をコミットメントの面から捉えることが課題であり、この意味で、コミットメントの心理的側面に着目した分析も整合的であることが判った。リレーションシップ・マーケティングの事業現場での適応事例としては、チャネルにおけるパワーやコンフリクト、アライアンス、製品要素間の相互依存性等といった

面での理論化が知られている。これをシンポジウムでの講演者（語り部）と参加者（受け手）に置き換えるなら、講演者の話法や講演内容の説得性、それに対する参加者の支持や反発、講演者や他の参加者との一体感、質疑応答を通じての信頼感の醸成などが考えられる。本研究では、これら心理的側面からの検証を基本としたい。

4 研究の目的と方法

4.1 研究目的

本研究では、リレーションシップ・マーケティングの視点から、語り部の伝承による疑似体験の実態を考察するため、地域防災シンポジウムの参加者にアンケート調査を実施し、分析と検討を加える。本研究が最終的に目指すのは、語り部活動が地域の防災活動に結びつくまでのプロセスを明確化することであり、ここではその一環として、シンポジウムの参加者がどのような影響を受けたかをアンケート結果から考察するものである。調査方法としては限定的だが、ここでの検討を通じて疑似体験のメカニズムの一端を明らかにしたい。何らかの示唆を得た場合、事後の受け手の行動やシンポジウム方式による伝承のあり方に関する有意な提言に繋がることが期待される。なお、視点となるリレーションシップ・マーケティングについては、その最も主要な構成概念であるコミットメントからのアプローチとなるが、ここでは特にその心理的側面を考慮する。

4.2 研究方法

アンケート内容については語り部に関する先行研究を踏まえ、質問項目を、①自然災害で危険な思いをしたことの有無、②これまでの自己の防災意識の程度、③家族や友人など周囲の人間の防災意識の程度、④シンポジウム後の防災意識の高まりの程度、⑤今後の防災活動のイメージが具体化した度合い、の5

つとした。①は二者択一、②～⑤は5件法で尋ねている。集計にあたっては、程度の高い順に5～1で数値化した。なお、用紙の最後に自由記述欄を設け「今の率直な気持ち」について尋ねている。この欄は手書きで200字程度までの記入が可能である。また、回答者は無記名とし、属性については10歳幅での年齢、性別、居住地（北九州市内か市外か）についてのみの選択とした。

ここでの分析は、仮説検証を企図したものではなく、あくまで探索的に行うものである。したがって、アンケートの集計結果についても、基本統計量を確認する他は、相関分析による関係性の検証にとどめた。想定される標本数を勘案すれば、因子分析や共分散構造分析は難しいと判断されたことによる。但し、分析結果を受けての考察については、以下項目を着眼点に設定した。

- (1) 問②～問⑤の間にどの程度の相関性があるか？
- (2) 自由記述欄への記入状況はどうか？ 特に、文字数の多少と問②～問⑤との間に関係性が認められるか？
- (3) 自由記述欄の内容から、「関係に関する認識や理解」「関係に対する肯定的な態度」「関係的な行為を遂行する態度」が窺えるか？

4.3 シンポジウムと語り部の概要

シンポジウムが開催されたのは、平成30年11月25日13時～14時30分、本学3号館3501教室においてである。実施の主体は地域防災リーダー育成プロジェクトで、平素の活動のハイライトとして学生メンバーが準備と運営にあたった。参集対象は本学の学生ならびに大学近隣の地域住民である。会の次第は、冒頭での主催者代表挨拶の後、基調講演が約60分、質疑応答が約20分であった。なお、司会・進行役は同プロジェクトの顧問である著者が務めている。参加者は受付で把握している限りで120名余であった。

語り部は、基調講演の講演者である佐藤敏郎氏である。同氏は東日本大震災の被災者であり、家族を津波被害で亡くしている。講演内容はそのような被災体験をまとめたものだが、自身が語り部であるとの前提で講演活動を展開して

おり、前述の語り部研究のレビューで抽出された語り部の要件と矛盾するものではない。さらに家族を亡くすという経験の語りについては、例えば「身近な死者から何を学ぶか」をテーマにした研究（やまだ・河原・藤野・小原・田垣・藤田・堀川，1999）や「友人の死の経験の語り」と語り直し」をテーマにした研究（やまだ・田垣・保坂・近藤，2000）を踏まえても、多分に整合性が認められる。ここでは語りの内容については考察対象としていないが、佐藤氏の講演が目的に沿ったものであることは付記しておきたい。

5 分析と考察

5.1 集計結果

アンケートはシンポジウム終了直後に実施した。用紙を事前に配布することはせず、シンポジウム閉会挨拶の中で実施についての協力を求め、異論が無いことを確認してから参加者全員に配布している。記入後の用紙は、会場を退出する際に受付へ提出するよう求めたが、提出は84通にとどまった。回答者の内訳をみると、男性47名、女性34名（無回答3名）、年齢は10・20代62名、30代1名、40代6名、50代5名、60代以上6名（無回答4名）、居住地域は北九州市内37名、北九州市以外35名（無回答12名）である。

集計結果の基本統計量は表1、相関係数は表2ならびに表3のようになった。ここでは問②～問⑤のほか、自由記述欄の文字数も変数として捉え集計に加えている。なお、記入のなかったものについては「0」としてカウントした。また、明らかな誤字・脱字は必要最小限で修正したが、語尾の「である調」「ですます調」については原文のままである。これにより、ほぼ同じ内容のコメントでも字数が異なることになったが、ここでは所与のものとして扱っている。

5.2 考 察

集計結果は、研究方法の項で述べた着眼点に従って考察する。まず、問②～

表 1 基本統計量

	問 ②	問 ③	問 ④	問 ⑤	文字数
平 均	3.54217	2.52439	4.73171	4.15663	51.38095
標準誤差	0.10470	0.11409	0.05220	0.08653	4.59105
中央値：メジアン	4	2	5	4	42
最頻値：モード	4	2	5	4	0
標準偏差	0.95383	1.03310	0.47268	0.78836	42.07764
分 散	0.90979	1.06730	0.22343	0.62151	1770.52783
尖 度	-0.03124	-0.08392	0.89170	2.69766	0.31138
歪 度	-0.59860	0.72501	-1.41990	-1.20546	0.92639
範 囲	4	4	2	4	164
最 小	1	1	3	1	0
最 大	5	5	5	5	164
合 計	294	207	388	345	4316
標 本 数	83	82	82	83	84

問②～問⑤は未選択箇所を欠損値とし、文字数は空欄を 0 としたため標本数が異なる。

出所：筆者作成

表 2 相関係数（全標本）

	問 ②	問 ③	問 ④	問 ⑤	文字数
問 ②	1				
問 ③	-0.37	1			
問 ④	0.06	-0.02	1		
問 ⑤	-0.05	0.03	0.41	1	
文字数	0.06	0.05	0.19	0.13	1

出所：筆者作成

表 3 相関係数（問①で危険な思いをしたことがあると回答した 19 標本のみ）

	問 ②	問 ③	問 ④	問 ⑤	文字数
問 ②	1				
問 ③	-0.17	1			
問 ④	0.39	-0.20	1		
問 ⑤	-0.02	-0.07	0.60	1	
文字数	0.14	0.24	0.24	0.34	

出所：筆者作成

問⑤の間については、全体として明確な相関性は検出されなかった。部分的には問②「これまでの自己の防災意識の程度」と問③「家族や友人など周囲の人間の防災意識の程度」の間で-0.37という弱い逆相関が、問④「シンポジウム後の防災意識の高まりの程度」と問⑤「今後の防災活動のイメージの具体化した度合い」の間で0.41という弱い順相関が認められる。後者については、もう一段の高水準の順相関が検出されてしかるべきとも思われるが、あるいは「イメージの具体化」という表現が判断の慎重さに繋がったのかもしれない。

さらに、問①で「過去に自然災害で危険な思いをしたことがある」とした19名のみを対象とした計量では、問②「これまでの自己の防災意識の程度」と問④「シンポジウム後の防災意識の高まりの程度」が0.39の弱い順相関を示した。また、問④と問⑤では、相関係数が0.60と水準を切り上げている。過去の体験で防災に敏感になっている参加者には、今回の語りがより大きく作用したものと考えられる。

次に、自由記述欄への記入状況である。この種のアンケート調査では定番のものとして設けられていることが多く、むろん記入は任意である。ここでも何らの条件や制約を付していない。それだけ回答者の心情も反映されやすいと思われたが、84通の回答のうち記入のあったのは73通であった。内容的には講演者への謝意もしくは励まし、自身の省察、今後に向けての決意等が目立つ。

文字数と問②～問⑤との相関をみると、これも明確な相関性は出ていない。但し、過去に危険な思いをしたことがあるとした19名については、問⑤「今後の防災活動のイメージの具体化した度合い」との間が0.34の弱い順相関を示している。イメージが具体化することと、それを自由記述欄に記入することとは別ロジックで捉えるべきだが、結果的に何らかの具体策に触れたことで文字数が多くなっている。ここでも過去の体験がある種の「呼び水」となっていることは多分に推測されよう。

最後に、自由記述欄の内容について検討する。リレーションシップ・マーケティングにおいて関係性を規定するコミットメントは「関係に関する認識や理

解」「関係に対する肯定的な態度」「関係的な行為を遂行する態度」という3つの心理的側面から観測される。ここでは、シンポジウム終了時点で、語り部と聞き手の間に何らかのコミットメントが生じたのではないかと考えた。そして自由記述欄のコメントに、①間柄の認識や理解に関する文言、②肯定的な文言、③今後の行動に関する文言、が各含まれているか否かを検討した。例えば、客観的な感想などは①に、講演者への謝辞や励ましなどは②に、今後の防災活動への具体的言及などは③に該当させている。なお、この作業については恣意性が伴いがちであるため、まず筆者間で素案を作成しプロジェクトのメンバー全員で精査した。

その結果が、後掲の「付録：自由記述欄の内容と文字数、評価」である。該当する文言が含まれていれば、そのコメントの行に「＊」を付した。該当文言の含まれないものは見当たらず、逆に、①～③の全てが含まれているものは73通のコメントのうち、15通であった。コメントの文字数が多いほどアスタリスクも増える傾向にあるが、中には40字程度で3つの側面が窺われるものもある。この分析結果を以て、語り部への共感がコミットメントに繋がるとするのは早急に過ぎるが、コミットメントの形成を心理的側面の3要素から捉えることの有効性は示されたと思われる。

6 おわりに

本研究では、語り部の伝承による疑似体験のあり様を考察した。地域防災シンポジウムの参加者を対象にしたアンケート調査からは、必ずしも十分な分析結果を得られたわけではない。それでも、過去に自然災害で危険な思いをしている参加者とそうでない参加者とは、明らかに伝承のインパクトの度合いが異なっていた。また、シンポジウム後の防災意識の高揚度が大きいほど、自由記述欄へのコメント量が増え、かつ内容的にも具体性が伴う傾向のあることが明らかになった。いずれも限定的に理解すべきものではあるが、研究の妥当性

を担保する材料にはなるものと思われる。

前述のとおり、本研究が最終的に目指すのは、語り部活動が地域の防災活動に結びつくまでのプロセスを明確化することである。したがって、早い段階で受け手に対する二次調査を行い、疑似体験が自己啓発や防災意識の高揚へどのように作用しているかを確認する必要がある。さらに、そのような自助努力が、受け手の属する地域あるいはコミュニティにおいて、いかなる集団的努力に繋がっていくかについても見届けたい。

以上を今後の課題として稿を閉じる。（了）

【謝辞】

地域防災シンポジウムで語り部の労をおとりいただいた佐藤敏郎氏には、ここに記して御礼を申し上げたい。

【注】

- 1 地域防災リーダー育成プロジェクトは、平成30年度九州国際大学学長裁量GPに採用されている。
- 2 本研究では、被災体験者による「語り部」活動がいくつかの段階を経て地域の自主防災組織（以下、自主防）に至るまでを、関係性マーケティングの主要概念である「信頼」と「コミットメント」に基づいて分析・検証することが最終目的である。具体的には、プロセスを4つの段階に分け、これらへ領域横断的にマーケティング理論の横串を通すことで、これまでほとんど議論されることのなかった変転作用の見える化を図りつつ、将来的に自主防の確立と強化とを考える。本稿では、このうちの「受け手の疑似体験」に焦点を絞り、地域シンポジウムでのアンケート調査から考察を試みる。
- 3 『大辞林第三版』（編者：松村明）三省堂
- 4 広島市公式サイトよりダウンロード（2019.1.3）
<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1525154329974/index.html>
- 5 想起とは、脳の記憶を写し取るだけの行為ではなく、周囲の環境と積極的に相互作用する中で1つの過去像を成立させようとする能動的な意味生成活動である（世界大百科事典第2版／平凡社）。このうち、他人に聞いたり相談したりといった行為によるものが共同想起である。一般には「共同」の語が用いられるが、ここで参照した研究者らは「相異なる活動をしながらも、何らかの目標に向かって実践的に活動を展開する場面を強調する」という意味において『協働』の語を用いている。

【参考文献】

- 渥美公秀 (2003). 「記憶の伝承に関するグループ・ダイナミックス」『大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科 2002・2003年度報告書 7, 臨床と対話』146-160.
- 久保田進彦 (2012). 『リレーションシップ・マーケティング・コミットメント・アプローチによる把握』有斐閣.
- ジェームス・ワーチ (2002). 『行為としての心』(和訳: 佐藤公治・黒須俊夫・上村佳世子) 北大路書房, 原著: Wertsch James V.1998, *Mind as Action*, Oxford University Press, Inc.
- 高野尚子・渥美公秀 (2007). 「語りによる阪神・淡路大震災の伝承に関する一考察 ―語り部と聞き手の協働想起に着目して―」『ボランティア学研究』8, 97-118.
- やまだようこ・河原紀子・藤野友紀・小原佳代・田垣正晋・藤田志穂・堀川学 (1999). 「人は身近な『死者』から何を学ぶか; 阪神大震災における『友人の死の経験』の語りより」『教育方法の探究』2, 61-78.
- やまだようこ・田垣正晋・保坂裕子・近藤和美 (2000). 「阪神大震災における『友人の死の経験』の語りと語り直し」『教育方法の探究』3, 63-81.
- 矢守克也 (2002a). 「博物館における震災体験の記憶と伝達; 北淡町震災記念公園(野島断層保存館)をめぐる」『奈良大学大学院年報』7, 40-67.
- 矢守克也 (2002b). 「演劇による震災体験伝達の試み; 『劇団青い森』の公演をめぐる」『奈良大学紀要』30, 129-143.
- 矢守克也 (2003). 「4人の被災者が語る現在; 語り部活動の現場から」『質的心理学研究』2, 29-55.
- Håkansson, Håkan. and Ivan Snehota (1995). *Developing Relationships in Business Networks*. London Routledge.

【付録】自由記述欄の内容と文字数、評価

自由記述欄のコメント	文字数	①	②	③
災害を経験した人、災害を経験したことが無い人、温度差は当然あるものだと考えている。しかし、それらには感情的なものもある。そうではなく何故？というものを突き詰めていかなければ教訓にならないと思う。貴重な話、そしてこの機会を有難う。	114	*	*	*
ニュースでしか見たことない貴重なお話を聞かせていただき有難うございました。	37	*	*	
貴重な話を聞いたことにより、今まで自分がどれだけ災害についての教えや意識が低かったか、甘かったかが実感できた。リアル（現実）を意識・考えることがいかに大事かがわかった。しかしリアルは体験しないと考えるのが、体験してからでは遅いということが理解でき、いかに想定内ではなく、想定外のことを考えることが大事かがわかった。	158	*	*	*
今まで自分の近くに人がいるのは当たり前だと思ってました。しかし、失うという怖さを疑似体験できたと自分は思っています。	58	*	*	
自分自身がまだ災害を体験したことがないので、防災意識というものについてまだ薄いなと思った。また、念のためということが大切であることを知った。	70	*	*	
防災意識をもっと高めないといけないと感じた。	22		*	*
今まで自分が何も考えず何もせずに、ただダラダラと生きてたことが恥ずかしいと思った。行動を起こせる人がすごいと思えた。	58	*	*	
自分は災害を受けたことがないですが、とても怖いと思いました。自分が災害を見たのは小学生の時でした。テレビ中継で見えていましたが、まだよくわからなかったと思います。しかし、今になってテレビであった災害が恐ろしいことだと思い、自分も気をつけようと思いました。	126	*	*	*
被災してまだ完全になっただけではなく、今までボランティア活動であつたり募金活動などが行われているので、少しでも自分ができることがあれば協力したいなと感じました。	80		*	*
すごく胸に響きました。	11	*	*	
災害は決して対岸の火事ではない！ 先週土曜日、小倉北区の小・中のPTAで連携して研究会（防災の講演）を開きました。やはり、災害に対しての意識が低いと思い知らされました。	83	*	*	
何か起こってからではなく、今、何かに対して対策をしたいなと思った。	33		*	*
震災・被災で失ったことがない分、失うことが怖く思った。失わないために念を入れなきゃ。	42		*	*
会いたくても逢えないことの辛さ、いつもの習慣、たまたましなかった時に限って被害に遭う悔しさを痛感しました。	53	*	*	

今日は有難うございました。命について考えました。もし自分であれば…と考ただけで、とても怖くなりました。また、子供達の力はすごい。そしてその命は輝いていると思いました。娘さんの話を聞き、学校と家の防災について考えなければいけないと思いました。父に「いつもありがとう」と伝えにいかねればと思いました。	150	*	*	*
「念のため」が大事だということがわかった。この先に続けていく覚悟が必要だと思う。これまでの機会的な避難訓練の改革が必要だと感じた。	65	*	*	*
時間が経って世間の関心が薄れてしまわないよう、常に高い意識を持つことが必要だと感じた。	43		*	*
なんとも言えない時間を過ごしました…。みなさんの無念を思うと、同じ子供を育てる身として改めて自分の振る舞いや意識に問いかける時間になりました。ありがとうございました。	83	*	*	
笑顔で語られる佐藤さんの勇気に驚くと同時に、心の整理にどれほどの時間がかかったかと考えると、ただただ自分自身の弱さから逃げたらダメだな、と感じています。この機会、ありがとうございました。	93	*	*	
帰ったら耐震に備える。	11		*	*
自分はあまり大きな災害を受けたことがないのですが、佐藤さんの講演を聞いて、わからないけど少しだけ辛い気持ちを受け入れることができたと思います。失ったことがたくさんある中で、当時の子供から大人までの人たちは、現在まで強く生きているのだと感じ、その中で自分たちができることは災害に対する防災を徹底していくことが大切だと感じました。	164	*	*	*
災害について何も知らなかったと改めて思わされました。	26		*	
北九州市でのハザードマップの再確認と家の備品の入れ替え。備えよ常に！	34		*	*
今日、震災があった時に話を聞いて、家に帰って家族に話して、防災準備をしようと思った。	44		*	*
「希望」があることに驚いた。悲しみは乗り越えられないものというワードが素晴らしく、感銘を受けた。	48	*	*	
佐藤さんのリアルな話を聞いて、自分に起こったわけでもないのに涙が出そうになりました。娘さんを亡くしたのにこれだけ明るく語り部活動をしていることがすごいと思いました。とても熱い心を持っていて「忘れて欲しくない」「これを未来に受け継いで欲しい」という気持ちがすごく伝わってきました。	139	*	*	
講演を拝聴し、前までは正直「他人事」のように感じていた。しかし、この貴重な体験から、自分もいつ命の危険に晒されるかわからないので意識を変えなければならぬと感じた。	81	*	*	*
かけがえのない命を守る責任、教育の現場で伝えていきたいです。	30		*	*

危機的体験を味わわなければわからないけど、実際、被災地を見に行ったときはびっくりしました。災害の後はわかるけど、災害時にどういった感情を得たかを知る事が出来てよかったです！	86	*	*	
いつ災害があってもおかしくない時を、いま生きているという事。一事一事を心に刻みました。	43	*	*	
人ごとといつも思っていました、それではダメなんだなと思いました。これからは1日1日を考えていこうと思いました。	56	*		*
金石市での小学生が生き残っていたと言う話を見ても、小学生・若者には率先避難者となる力があります。訴求力があります。その上で「みんなが逃げる」と言うことを実行するために、防災を楽しくするイベントを作りたいと思っています。	109	*	*	*
今後、いろいろな地震などの災害が起こる中で、たまたまその場に居合わせてしまうこともあると思います。ただ、その場で慌てず、自分に何ができるのかを意識しないといけなと思った。	86		*	*
最初の小学生の句は悲しかったです。	17	*	*	
実際に被災されたお話を聞いて、これまで以上に防災について考えることができました。	40	*	*	
「対立を調和にしてハーモニーにする」と言うのは心に響きました。	31	*	*	
うまく言葉に表せません。大切な人を亡す辛さはよくわかります。それゆえに言葉にできません。	44	*	*	
自分の意識の低さを実感しました。無駄なことになったとしても、準備することは大事なんだなと感じました。	50	*		*
今後、絶対に災害にあわないとは限らないので、後悔しない日を過ごしていきたいと思った。	42		*	
被災者の方々にどう言葉をかけていいのかわからないけど、彼らが語り続けていることを真摯に受け止め、今後の生き方を改めていこうと思った。	66	*	*	*
津波や地震が起こったとき避難を考えておきたいです。	25		*	*
防災についてしっかり考えたい。	15		*	*
今日は素晴らしいシンポジウムに参加することができ、とても有意義な時間を過ごしました。私は防災を地域に伝える役目があるので、今後も皆様のご活躍がますます発展されることを期待しております。ありがとうございました。	105	*	*	
防災に対する意識のギアが高まった。	17	*	*	
あの日、あの時の実体験、生の声を聞かせていただき心に染み込み目頭が熱くなりました。佐藤先生、これからも語り部を続けて、日本中の人たちに命の大切さ、私たちがこれからすべきことなどなど伝えていって下さい。今日はとてもいい話を聞いてよかったです。ありがとうございました。	132	*	*	

災害はどこでも起こると思いつつも、今日この場で何か起こった時はどうしようかと思う。日頃からもっと考えないといけないと思われました。	66		*	*
いま普通に生きている人にとって、本当の意味での怖いという気持ちはわからないものではないかと思いました。そういう気持ちはわからないけど、わかるよう努力していきたいと思いました。	87	*	*	
いつ何が起こるかわからないので、何か起きてもいいように防災意識が高くなった。	39	*		*
防災意識についてほとんど考えたこともなかった。自分が被災すると考えなかった。しかし、今回の話を聞いて防災の意識というものはかなりできたので、これからの人生に活かしていきたい。	88	*	*	*
ボランティア、企業、学校などの多様な主体による防災分野の活動は、今後とも広がりを見せていくものと考えた。これらの多様な主体が連携していくこと。	71	*	*	*
今度、南海トラフが起こりそうになった時に、防災意識を持って行動しようと思いました。	41	*		*
防災への向き合い方が高まった。	15	*	*	
震災が起こったことによって、様々な被害が出て、沢山のことに気づいたことと思う。津波が起こってよかったのか悪かったのか…。	60	*		
もう少し解りやすく話をしてもらえると良かったと思う。何を伝えたいのかがわかりにくい。	42	*		
私は警察官なので仕事柄防災に関しては知識等があります。一般の人への意識付けのため、このような気機が多くあればいいと思います。	63	*	*	*
ハード面・ソフト面などをどう繋いで考えていくか、形にしていくか。政策はハード面で進んでいるので、それに不足している要素（ソフト・コミュニティ等）をどう関わらせるのか、包括的に…。	88		*	*
3.11のことを忘れないようにしたいです。	21	*	*	
自分の地域には災害がおこらないで欲しいと思った。	24		*	
備えを十分にしようと思った。いまを全力で楽しく生きようと思った。	32		*	
3.11は知っていたけれども自分の想像をはるかに超えていた。	30	*	*	
「念のため」という言葉が自分の意味を救うかもしれないということから、これからの生活は「念のため」を心がけていきたいと思いました。	67	*	*	*
命の大切さが改めてわかった。	14	*	*	
自分の知らない世界があった。そのことを知ったいま、何か行動に起こさないと強く思った。	43	*	*	*
今からできることを今から始めようと思いました。	23		*	*

普段から聞けないような内容を今回聞くことができ、貴重な体験になりました。	36	*	*	
災害にあったのはだいたい前の事なので、防災意識が薄れていたなと感じました。	36	*	*	
いつ何が起こるかわからないので、対策や準備を整えたいと思います。	32		*	*
防災をすることの、どれだけ大事かがわかった。	22	*	*	
他人事のように考えていたことに対する後悔で手が震えていました。私事ながら、中学生の頃に気仙沼中学校の生徒さんと歌で交流をしていました。しかし当時は災害なんてと考えており、今回の話からふと思い出し、どうして他人事と思っていたのかと後悔しました。その意識の変化そのままに、防災について、命について考えたいと思います。	156	*	*	*
防災についての考えが変わりました。	17		*	
家に帰ったら、自分の家で、住んでいる地域で危険なところはないか、もし地震が起きたらどうするかを具体的に考えていこうと思いました。	65		*	*
私は熊本地震を体験しました。私の住んでいる地域は被害が少なく、私自身、前と変わらない生活を1か月後には送れるようになりました。「温度差」という言葉が、とても心にグサッときました。何を言えばいいのか良く分からないのですが、お話を聞いて涙が止まりませんでした。	128	*	*	